

ピッツバーグ大学での研究留学生活

Department of Urology
University of Pittsburgh

黒部 匡広
(筑波大学医学医療系腎泌尿器外科学分野)

2018年2月よりピッツバーグ大学泌尿器科の Neuro-urological Research 部門にて研究留学をさせていただいております。学生時代より海外留学に憧れ、英会話教室に通ったり米国医師免許試験を受験したりと準備をしておりましたが、この度貴重な研究留学の機会をいただき大変感謝しております。

所属先のラボは膀胱機能に関する基礎研究、特に病態モデル動物を用いた研究において全米有数の実績を有しており、私は現在低活動膀胱の病態解明に関する研究の他、前立腺肥大症モデルや尿失禁モデルなど複数の研究プロジェクトに取り組んでいます。個々のラボメンバーがそれぞれ別個のプロジェクトに取り組んでおり、各自のペースで実験を進めつつ、分からない事は互いに教え合う環境です。

ピッツバーグ市はペンシルバニア州第二の都市で、人口30万人程とそれほど大きな都市ではありませんが、利便性と豊かな自然のバランスが取れており、物価や家賃も高過ぎず治安も良く、2011年には世界住みやすい街ランキング (The Global Liveability Index, 2011) で全米1位を獲得しました。冬は時々-10℃くらいになる日もありますが雪が連日降り続けるという事は無く、夏は暑過ぎず湿気が少なくとても過ごしやすいです。ピッツバーグはかつてアンドリュー・カーネギーが創設したUS スチールの本拠地として繁栄したものの、鉄鋼業の縮小とともに一時は衰退しておりました。その後医療、金融・保険業、IT産業、教育・文化産業などへの構造転換に成功し、現在も発展を続けています。またアンドリュー・カーネギーが文化施設や教育施設に多額の寄付を行った事もあり街自体の文化・教育水準はかなり高く、博物館や図書館もたくさんあり、子育ての環境としてかなり恵まれている印象です。渡米時点で2歳の双子と生後3か月の赤ちゃんを連れての海外生活で最初は不安もありましたが、週末に子供と楽しく過ごせるスポットがたくさんあり、今日はどこに行こうかと迷ってしまうほどです。街の雰囲気は留学前に住んでいた、茨城県の筑波研究学園都市に近いと思いました。

ピッツバーグ大学の他の部門で研究をしている日本人の先生方も多いですが、コンピューターサイエンス全般で有名なカーネギーメロン大学 (人工知能分野で世界1位; CS

Ranking, 2018) も近くにあり、ここへ留学されている日本人もかなり多く、英語が得意ではない妻も多くの日本人のママ友に恵まれて楽しく過ごせています。また日本食のレストランや日本食材のお店もあり、留学後1年を過ぎた現時点でもホームシックにならずに過ごせています。

今回の留学を通じて多くの素晴らしい方々と出会い、研究面でも生活面でも多くの経験を重ね、大きく成長する事が出来ました。また家族と過ごす時間も多く、小さい子供達の世話で多忙な妻の支えになる事が出来たかと思えます。

このような貴重な機会を与えてくださいました筑波大学腎泌尿器外科の西山博之教授をはじめ、泌尿器科教室・同門会の先生方、また多大なご支援をいただきました上原記念生命科学財団の皆様にも心より感謝申し上げます。

(2019. 4. 17受領)

フィラデルフィアを走りぬいた1年9ヶ月

Department of Biostatistics, Epidemiology,
and informatics
Perelman School of Medicine University of Pennsylvania

今泉 貴広

(ペンシルバニア大学ペレルマン校臨床疫学・生物統計学部門)

私が留学したペンシルバニア大学は「時は金なり = Time is money」などの名言で有名な、米国建国の父の1人であるベンジャミン・フランクリンが創立した大学です。そして大学のある街は一時的には米国の首都になったこともあるフィラデルフィアです。米国の建国を語る上で重要な街であり、今でもフィラデルフィアに住む人々はそれを誇りとしています。

留学前はアメリカと聞いて、銃社会、人種差別、凶悪犯罪などネガティブな印象ばかり思い浮かべていたので、生きて帰ってくることを最低限の目標としていました。留学してすぐに待ち受けていたのは、別の意味での苦労でした。勉強していった英語もほとんど役に立たず、ミーティングでは様々な意見が飛び交い、次から次に流れていく会話。当初1年で研究成果をまとめてくる予定でいましたが、自分の考えをうまく伝えることができず、途方に暮

れる日々を送っていました。そんな中で上原記念財団から運良くグラントを獲得することができ、留学期間を延長させていただくことができました。

良くも悪くもアメリカは「自由」がキーワードでした。金曜日の午後はオフィスがガラ空きになります。家族と過ごす時間を優先している人が多く、遅くまで研究をしているのは留学生在が中心です。しかし早くオフィスを後にする人達の生産性の高さは目を見張るものがありました。早く帰っている様に見えて、時間を見つけてやるべきタスクを確実にこなしていると知ったのはだいぶ経ってからでした。意思決定の迅速なところや、立場の違いを超えて自由に発言するところなど、日本の労働・研究環境に足りないものがたくさんあることを知ることができたことも大きな収穫でした。

仕事と私生活のバランスは働き方改革が叫ばれる日本において喫緊の課題だろうとおもいますが、その点においても先を行くアメリカで予行演習を行うことができました。休日にフィラデルフィアで知り合った仲間とともにスクルーキル川沿いをジョギングし、夕食の交わりをして分野や人種の違いを越えた意見交換をする機会を得ることができました。そして遂にはランニングクラブを作って3つのフルマラソン、3つのハーフマラソンに出場するに至りました。私生活の充実のおかげか研究成果も徐々に始め、帰国直前に何とか2つの論文のドラフトを書き上げるに至りました。

このアメリカ留学は、一つ一つの試練をクリアして少しずつ昨日の自分よりも成長していき、でもまた自信を失って、それからまた頑張る、という繰り返しでした。40歳を目前にした自分が comfort zone から抜け出して挑戦することは、きっと今後の人生に大きな影響を及ぼすに違いないと思います。

最後になりましたが、留学という決意に理解を示してくれた家族や名古屋大学腎臓内科の皆様、ならびに1年9ヶ月にわたる生活の糧を提供して下さった上原記念生命科学財団に深く感謝いたします。これから留学を目指す次の世代の方々にも変わらぬサポート体制を提供していただければ幸いです。 (2019. 6. 5受領)



毎日の通勤で通るサウスブリッジからフィラデルフィアのダウンタウンを眺める
この景色が日々の活力を与えてくれました